パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（七）

高橋龍三郎・中門亮太

はじめに

本稿で述べるワリ（Wari）島は古くよりトロブリアンド（Trobriand）諸島を中心とするクラ（Kula）交易の一翼を担った島として著名であった。この島で生産された素焼きの土器が遠く離れた島々に運ばれ、その地で使用されたことが知られている。P. MayとM. Tucksonのまとめた"Traditional potteries of Papua New Guinea"には、この島の代表的な製作者であるマイラ（Maila）が紹介されている（May & Tuckson 1982）。古くから土器製作・輸出の島として著名である。二〇〇九年八月に筆者らはワリ島を訪問して、土器生産の実態を調査した。それは以下のような理由による。

昨年までパプアニューギニア本島東端部イーストケープ（East Cape）を調査してきた筆者らは、ワリ島で製作され本島に向けて輸出された「ワリ式土器」を多数発見することができた。文様の違いや器形、器壁の厚さなどから、それらは容易に在地の土器と識別することができる。

それらはトレハ（*toleha*）などの儀式時に大量の料理で来客をもてなす時に使われるだけで、普段は高床の下などに伏せられて保管されるのが常である。一般に大型に傾くのは儀式時の使用と関連している。それらの異系統の土器がはるか八〇kmの波濤を超えて、どのようなメカニズムで本島にもたらされたのか。そこに親族基盤社会の原則が作動するとすれば、どのようなメカニズムで作用しているの

か。生産と運搬、搬入と交換などの諸活動の中にそのような社会的要因がどのように関わるのかについての検討は大変重要な項目だと考えられる。

もう一つ今回の調査の重要な主旨は、ワリ式がイーストケープの在地伝統の土器に与えた影響についてである。両者は製作技法、文様などの諸点において互いに異質な性質を帯びているが、ワリ式のいくつかの文様要素がイーストケープ伝統の中に取り込まれて、いわば在地土器の中で模倣されている事実が観察される。模倣がなされる背景には単なる趣向や流行といった皮相的な要因だけでなく、社会的要因が何らかの形で作用していると考えられるのである。

それらの探求は、筆者らが究極的な目標とする縄文式土器の型式のあり方を考究する上で重要な示唆を与えてくれると期待されるのである。縄文式土器の中にも、在地的な土器型式の中に異系統の土器が搬入され、しかもその文様要素が取り込まれているのを観察するが、イーストケープではそれと同じ現象を民族誌の中で観察することができるのである。土器製作の間にどのような共通した因子が働き、かかる共通の現象を引き起こしたのかについては、いままで明確な解答が与えられていない。筆者らはそれらの先史学の課題を解決するために、ワリ式土器の本場であるワリ島を訪問し、まず搬入される側のワリ式について土器製作に関わる社会的要因について民族調査した。

（高橋龍三郎）

1．二〇〇九年度の調査概要

二〇〇九年度調査は、八月五日から十五日にかけて、ミルンベイ州ワリ島において行った。我々は、二〇〇五年度にヤバム（Iabam）島において調査を行って以降、ニューギニア島イーストケープのケヘララ（Kehelala）ミッション、トパ（Topa）ミッションを中心に土器作り民族誌に関する調査を行ってきた（高橋他　二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九・二〇一〇）。その際、イーストケープでは在地の土器に加え、ワリ島からの搬入土器が多数あることを確認した。聞き取り調査では、ワリ島の土器が半ばブランド化しており、ミルンベイ周辺で非常に好まれて流通している状況を確認できた。

ワリ島の土器作りは、本地域における土器の生産・流通体制を探る上で非常に重要である。二〇〇九年度調査は、二名によるわずか十日余りの調査であったため、ワリ島における土器作りの概要把握に努め、今後の調査の基礎データ収集を目的として行った。主な調査内容は、GPSによる地図の作成、集落の記録、親族組織や社会組織に関する

表1　2009年度調査行程

日程	行程・調査内容	調査地
8月5日(水)	【空路】成田空港⇒ジャクソン国際空港（ポートモレスビー）	
8月6日(木)	今次調査の打ち合わせ	ポートモレスビー
8月7日(金)	【空路】ジャクソン国際空港⇒ガーニー空港（アロタウ） ミルンベイ州政府のオフィスにて調査許可証の申請・発行、昨年度調査報告書の提出 Jimmy Muraga氏と調査内容の打ち合わせ マーケットにて食料、生活雑貨等の購入	アロタウ
8月8日(土)	【海路】モータボートでワリ島へ Councilor, Minister, Pastorへ挨拶 集落付近の踏査	ワリ島
8月9日(日)	教会にて島民へ挨拶、調査協力の依頼 親族組織に関する聞き取り調査	ワリ島
8月10日(月)	土器製作の実見、土器製作者への聞き取り調査 親族組織に関する聞き取り調査	ワリ島
8月11日(火)	土器製作の実見、土器製作者への聞き取り調査	ワリ島
8月12日(水)	GPSを用いた島の踏査 チーフに関する聞き取り調査	ワリ島
8月13日(木)	土器データの収集 GPSを用いた集落の記録、集落に関する聞き取り調査	ワリ島
8月14日(金)	【海路】モータボートでアロタウへ ミルンベイ州政府へ調査終了の報告 【空路】ガーニー空港⇒ジャクソン国際空港	アロタウ ポートモレスビー
8月15日(土)	【空路】ジャクソン国際空港⇒成田空港	

聞き取り調査、土器製作の実見と土器データの収集、土器製作者への聞き取り調査である。調査行程の詳細については表1を参照していただきたい。

（中門亮太）

2．GPSによる踏査

（1）調査地の概要

ワリ島は、ミルンベイ州南東島嶼部のマッシム（Massim）地方の南西に位置する（図1）。バシラキ（Basilaki）島やトゥベトゥベ（Tubetube）島を含む、エンジニアリング諸島（Engineering Group）を構成する島の一つで、行政的な区分としてはヴァナヴァナ地域政府（Bwanabwana Local Area Government）の管轄下にある。州都アロタウ（Alotau）からは、モーターボートで約四時間の距離にある。東西約四km、南北約一kmの東西に細長い島で、島南部には広大なサンゴ礁が広がる。マッシム地方では、ニューギニア本島最東端のイーストケープからカルバドス諸島まで、広範な地域で土器生産がおこなわれているが、ワリ島は今日その中心的な立場にある。

言語はオーストロネシア語族に属するスアウ（Suau）諸語が話されているが、キリスト教が広く信仰されており、島民の多くは英語を話す。

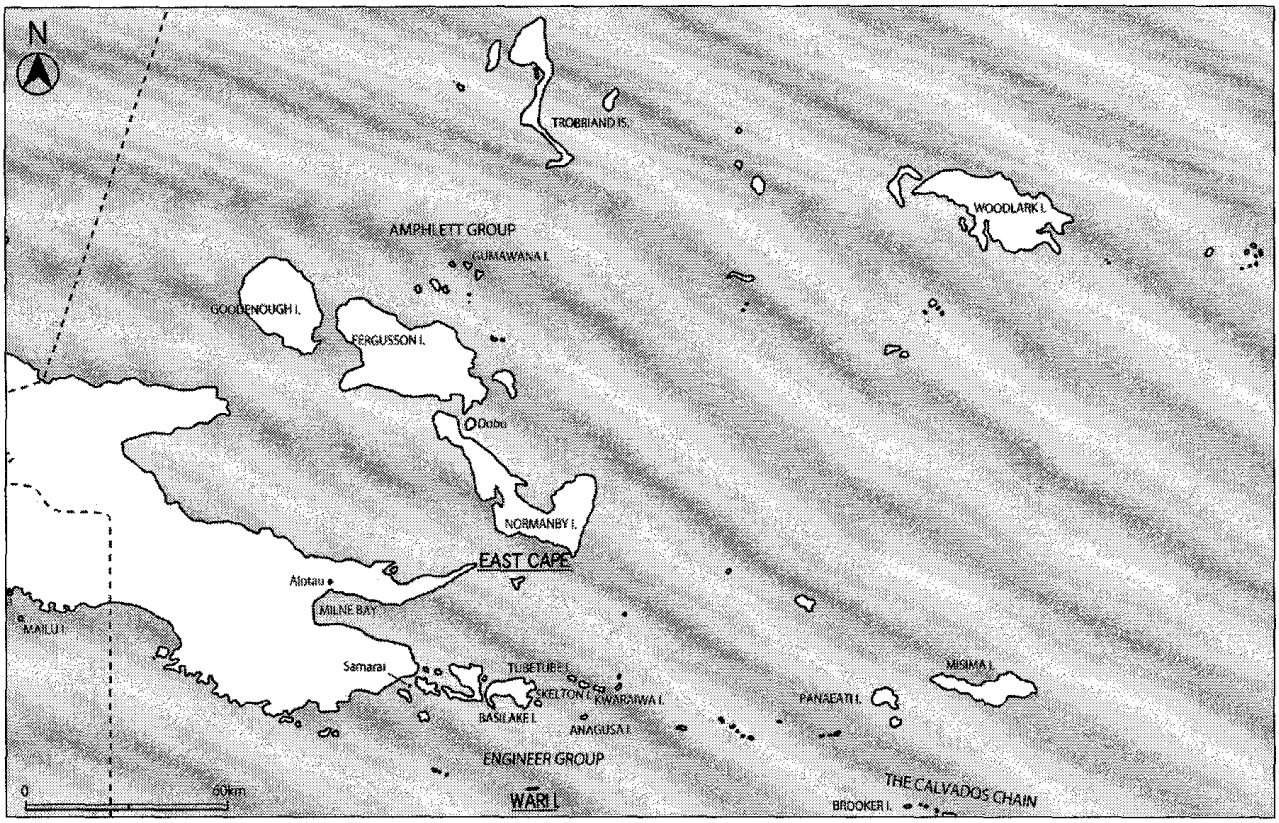

図１　マッシム地方

生業の中心は焼畑と漁撈であるが、ワリ島は元来土壌がやせているため、カヌーによる他地域との交易も非常に重要な地位を占めている。近年では、ナマコ漁による現金収入が主要産業の一つになりつつある。乱獲や資源枯渇を避けるための計画的な管理がおこなわれており、エンジニアリング・グループの中では裕福な島の一つである。一九五〇年代からは、人口の増加が著しく、二〇〇二年には一〇〇〇人を超え、人口密度は一平方キロメートル当たり四五〇人にも及ぶ（Simon Foale 2005）。

（2）GPSによる踏査

今年度調査では、今後の調査の基礎データとすべく、GPSを用いて海岸線、道路、および集落の位置を記録した（図2）。集落はすべて島の南西岸に営まれており、計二六集落を記録した。島の南岸は砂浜が広がり、北岸は切り立った絶壁が広がっている。集落が営まれる範囲には、柵により区画された道が走っており、道路を挟んで南北に居住域が作られる。南側は砂浜が広がり開けており、特に建物が集中している。北側は樹木が生い茂っており、一～二世帯の家族が居住している。集落は海岸線から内陸へ向かって縦長に展開する形が一般的である。島内にはいくつかの教会があり、集落の最西端には学校がある。

図2　ワリ島

島の内陸部、および集落の東側は焼畑として利用されており、バナナやタロイモ、サゴヤシなどが栽培されている。島民が一〇〇〇人以上いるため、焼き畑はかなり広範囲にわたって営まれている。ワリ島のやせた土壌ではヤムイモが育たないため、ミルンベイ州で特徴的にみられる貯蔵施設（ヤムハウス）は確認できなかった。食料は、基本的に必要な分をその都度畑から採集してくるようである。建造物の配置や構造については、追加調査が必要である。

（中門亮太）

3. 親族組織に関する調査

(1) クランとトーテム

ワリ島には母系制に基づく社会組織が存在する。また、親族組織を大きく包括するものとして、クランが存在している。ワリ島には四種類のクランがあり、それぞれ鳥をトーテムに有している（表2）。トーテムに対しては強い尊敬の念があり、食肉や殺傷はタブーである。また、過去には同一クラン内での通婚は禁止されていた。同一クランでの通婚は一族の恥であり、古くは厳しく罰され、最悪殺されることもあったという。

親族組織は母系に基づいているため、島民は母方のクランに所属し、土地は母からもらうものである。土地は個人ではなくクランの所有物であり、自身が属するクランの土地であれば、どこでもいつでも居住が可能である。これはワリ島内に限らず、他の地域でも同一クランの土地には居住可能とのことであった。一方で、関係者が生きている場合は、夫型居住や父方居住も認められる。土地利用には比較的寛大で、自身が属する土地以外に妻や夫の土地も利用

表2　ワリ島におけるクランとトーテム

clan	Magisubu	Atakena	Dawasi	Kisakisa
totem	eagle	small eagle		
hamlet	Guwawana	Kapwakapwa	Kasadekawa	Konpauli
	Galigali	Kamateko	Kulupoko	Kasadedei
	Logivi	Kasasinabwana	Tuame	Mageyau
	Waidimili	Tupwayawa		
	Istete	Kasaleiweya		
	Malikiliki	Pwaneamwana		
	Manelian			
	Sagasagai			

が可能であるという。母方居住を基本としつつも、関係者がいる限りにおいては夫方居住や父方居住が認められるという、比較的緩やかな居住形態はイーストケープにおいても確認されている（高橋ほか　二〇〇九・二〇一〇）。

今回調査で確認された、クランによる土地所有の形態は、人の移動やモノの移動を考える上で非常に重要な点である。なぜなら、本地域は、カヌーによる海上交易が日常生活においても重要で、食糧を始め様々な物資が広く拡散している地域であり、物資の交換は親族組織を通じて行われることが多いからである。土器も交易品として重要な地位を占めており、ワリ島のように半ばブランド化した土器は、他地域の在地の土器に少なからず影響を与えることが考えられる。その場合、クランを通じた土地利用が、土器の分布や移動にある程度の制限をかけ、土器型式の分布に大きな影響を及ぼすと考えられる。今後は、土地利用の実態とともに、周辺の島々における調査も重要となるであろう。

（2）チーフ

ワリ島においては、一九四〇年代までチーフが存在していた。チーフにはビレッジチーフ（Bala）、クランチーフ（Guyau Kiukiuna）、パーマネントチーフ（Guyau Sinabwana）の三種類があり（図3）、パーマネントチーフはアタケナクランのチーフが兼ねていたという。

チーフは男性が務めるが、社会組織が母系制であるため、チーフもまた母方をたどって継承されていく。つまり、あるチーフの死後は、チーフの息子ではなく姉妹の息子（甥）が受け継ぐこととなる。一般的に、母系に基づく最年長の者がチーフとなるが、伝統的知識が乏しい場合などは、パーマネントチーフがより望ましい人物を選ぶという。また、クランチーフは、そのクランに属するビレッジチーフの最年長の者が務める。

チーフには、戦争時の権力や、一夫多妻制、儀礼の開催や儀礼時における分配、土地の分割や譲渡、カヌーの保有など、多くの特権があったという。しかし、チーフの権力はあくまでワリ島のみにおけるものであり、他地域の同一クランには影響

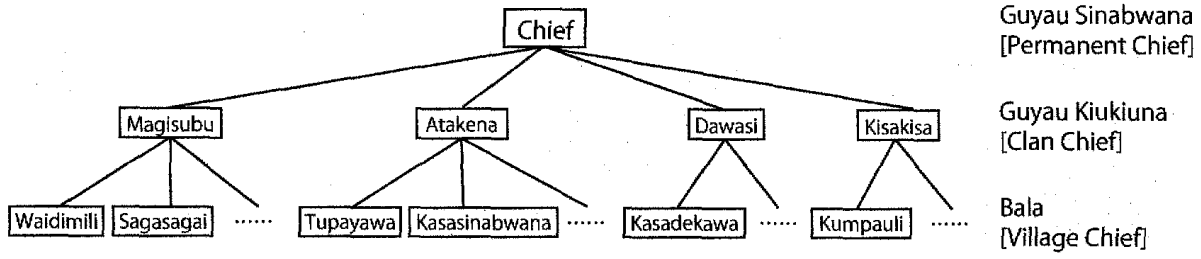

図3　チーフの概念図

力をもたなかったようである。

（中門亮太）

4．土器に関する調査

ワリ島は古くより「土器の島」として周辺地域に知られている。トロブリアンド諸島を中心としたクラ交易でも、ワリ島の土器は交易品として高く評価されてきた。ワリ島は、クラ交易網とマイル（Mailu）交易網とをつなぐ要所地に位置しており、周辺の島々で製作される土器にも文様や製作技法などで強い影響を及ぼしている。[1] 土器製作が発展した要因の一つとして、島の土壌が痩せていることが挙げられる。特に、財として重要な位置を占めるヤムイモや、コミュニケーションツールとしても用いられるビンロウヤシなどが育たないため、周辺地域との交易は重要であった。現代でも、食糧不足の際は土器と食糧との交換を行うことがあるという。

（1）器種と器形

ワリ島には、伝統的な土器として鉢（*gulewa*）と浅鉢（*kawaega*）が存在し、その他に土器成形用の皿（*nebane-ba*）がある（図4）。現代では、フラワーポットも作成しているが、これは一九七〇年代から作られ始めたものであり、交易には使用しないとのことであった。鉢はイモ類や米などの煮炊き用として、浅鉢は小麦粉やサゴデンプンを練ったものを焼く際に用いられる。特に鉢は、器壁が薄いことが特徴で、大型品が多く、儀礼時など多くの人々のための調理を手早く行えることから、他地域でも非常に人気がある。

一方で、他地域からの搬入品はほとんど見られず、今次調査ではブルーカー（Brooker）島からの搬入品を二点確認したのみであった。

もっとも一般的な鉢は、丸底で屈曲部を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。文様は屈曲部に区画文が描かれ、櫛歯による幾何学的な文様が口縁部に描かれる。同様の器形はイーストケープにおける鉢（*gituma*）や、エンジニアリング・グループの

図4　ワリ島の土器（左：*gulewa*、中央：*kawaega*、右：flower pot）

トゥベトゥベ島、コライワ（Kwaraia）島でも見られる。製作技法はいずれもいずれも輪積みによる成形法がおこなわれており、マッシム地方南部に特徴的な器形であるといえる。[2]

とりわけワリ島の土器は、前述のように器壁が薄いことが特徴である。また、我々がこれまで集めた土器データからみると、ワリ島の土器は文様幅、すなわち口縁部が広いことが特徴としてあげられる（高橋ほか　二〇一〇）。今次調査では、他地域との差異を生み出すそれら二点の背景を探ることに注目し、土器製作の実見を行った。

（2）土器製作

【下準備】

粘土採掘坑は島の東側に存在する。粘土には赤・黒・灰白色の三種類があるが、とくに赤と黒がよい粘土であるという。粘土採掘坑はここ一か所のようで、ワリ島の住民であれば、誰でも採集が可能である。

採掘してきた粘土は、天日にさらしたのちに、石皿と磨り石を用いて砂礫を除去する（図5―1）。その後、いったん水にさらして、再度徹底的に砂礫を除去して冷暗所に安置しておく。

【成形・整形】

土器作りは、多くは胡坐をかいて行われる。まず、粘土を適量手に取り、両手で揉みだして粘土紐を作出する（図5―3）。粘土紐を足頭部の上で巻き上げ、底部を作出する（図5―2）。底部を作出したら、成形用の皿の上に置き、粘土紐を積み上げていく（図5―4）。粘土紐は螺旋状に巻き上げず、きちんと一段で粘土紐をちぎり、反時計回りに押しつぶしながら積み上げていく。ある程度積み上げたら、人差指で輪積み痕を消し（図5―5）、また粘土紐を積み上げていく。胴下半部から屈曲部までを成形したら、内外面ともにユビナデを施し輪積み痕を消していく。その後、口縁部を立ち上げるために土台をしっかりさせるため、風通しの良い日陰でしばし乾燥させる。

器面がある程度乾燥したら、輪積みした端部をつまみあげて、もう一段粘土紐を積み上げる。その後、外傾接合によって口縁部を立ち上げていく（図5―6）。口縁部を立ち上げたら、内外面ともユビナデを施し（図5―7）、調整を行って成形は終了となる。その後、数日乾燥させ施文を行う。

【施文・調整】

土器を引っ掻いてみて、爪に粘土がつかないくらい乾燥したら、器面の調整及び施文を行う。器面の調整は、まず貝殻の腹縁部を用いて内面を削っていく（図5―8）。ケ

1. 砂礫の除去

2. 底部の作出

3. 粘土紐の作出

4. 胴部の成形

5. ユビナデによる調整

6. 口縁部の立ち上げ

7. ユビナデによる調整

8. 貝殻によるケズリ調整

9. 口唇部の切り出し

10. 手の平によるナデ調整

11. 施文

12. 区画文の施文

13. 内面のナデ調整

14. 完成

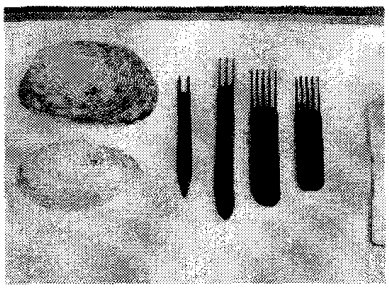
15. 施文具

図5　土器の製作工程

ズリは底部から口縁部を向かって施す。外面も同様に胴下半部から口縁部へ向かってケズリを施す。ケズリ調整は、輪積み痕が消えた後も施され、器面を薄く仕上げていく。その後、貝殻の背面及びユビでナデ調整を施す。この際、余り水は用いず、ミガキに近いナデとなる。その後、口唇に水を付け、貝殻の腹縁で口唇を五㎜ほど削り取って、口唇部を平らに作出する（図5―9）。口唇部を作出したら、水を多用し、手のひらを使って土器全体に水をなじませるようにしてナデ調整を施す（図5―10）。

土器の表面に水が馴染んだら、施文を行う（図5―11）。施文具はクロヤシの木片で作成した櫛歯状の工具で、二本歯のものから六本歯のものまで数種類ある（図5―15）。施文は、まず屈曲部と口唇部に波状線を横位に巡らせる。その後、波状線の間に単位文様を数単位描いていく。最後に、櫛歯状工具の持ち手側で、屈曲部に刺突を連続して巡らせ、区画を行う（図5―12）。施文が終了したら、水を多用して内面のナデ調整を行い（図5―13）、風通しのよい日陰において数日間乾燥させる（図5―14）。

三～四日乾燥させたのち、土器を逆位に設置して、貝殻を用いて底部の輪積み痕を消していく。その後、さらに五日ほど乾燥させて焼成を行う。

（3）土器製作に関する聞き取り調査

ワリ島では、非常に多くの女性が土器づくりを行っている。多くは一〇代のころに母親から土器作りを習う。製作技術は幼いころに学ぶことが重要であるらしく、幼少期に親の都合でワリ島を離れていた人は、ほとんど土器製作ができない。一方で、母親が土器製作をできなくとも、興味をもつことで土器製作技術を習得する若者も存在する。その場合は、同一クランの年長者から習うことが一般的である。土器製作は、基本的に各自が必要に応じて行っているが、親子や同世代の友人と一緒に作ることもあるという。

土器は一年で一人平均五〇個ほどを作成するが、自家使用が主目的である。自家使用のほかには、食糧との交換やマーケットで売るために作られる。土器の価値は大きさによって決まり、大型の土器はヤムイモ一〇個相当の価値がある。[3] 交換は主に同一クランに属する親族や縁戚関係を媒介として行われるが、その後不特定多数の人々と二次交換が行われる場合もある。

文様も母親から習うことがほとんどである。特に情報交換などは行われないが、他の製作者の文様を見て真似ることは頻繁に行われるという。また、粘土採掘坑が一か所であるためか、粘土を共有することもあり、他者がとってきた粘土で複数の製作者が土器を作ることもある。ただしそ

の場合、土器の所有権は粘土をとってきたものにあるようである。調査においても、粘土採掘者が作成された土器を保管している状況が確認された。

（4）小結

以上みてきたように、ワリ島の土器作りは、本島イーストケープと異なり（高橋ほか　二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九・二〇一〇）、成形から施文までに数度の乾燥期間をはさむことが特徴としてあげられる。ワリ島の粘土は、本来混和剤となるべき不純物を徹底的に取り除いているため、非常に粘性が高くやわらかい。そのため、粘土を適宜乾燥させなければ、器形の立ち上げや、ケズリ・ミガキの調整に耐えることができないのであろう。最初の乾燥は、胴下半部を乾燥させることで土台がしっかりし、口縁部を高く立ち上げることを可能とし、ワリ島特有の幅広い文様帯が作出される。また、成形後に乾燥を行うことで、ケズリ調整による器壁の薄手化が可能となる。

イーストケープにおいて、在地の土器製作者に「ワリタイプの土器をなぜ作らないのか」との質問をした際、製作者たちは口をそろえて「粘土が違うからできない」という答えをした。ワリ島の土器は、製作技術の違いもさることながら、粘土の精製という根本の部分からイーストケープとは異なる。このことから、単なるモノの移動のみでは、他地域の土器の模倣は難しいということが考えられる。イーストケープに大量にワリ島の土器が流入していながら、かの地において模倣土器が少ない背景には、土器を見ただけではわからない根本的な技術の差異が影響しているのであろう。言い換えるならば、イーストケープにおける模倣土器には、その背後に技術的な交流があったことを伺うことができる。今後、両地域における土器製作者の移動や親族組織の広がりを探ることで、模倣土器の出現、ひいては型式の変化の背景を探ることができるであろう。

（中門亮太）

おわりに

パプアニューギニアの土器生産に関する民族誌調査を開始してから五年目を迎えた。この間に土器製作の技術的側面だけでなく、製作者の属する親族組織や婚姻制度、婚後居住形態、トーテムなどの製作者レベルに反映する社会的諸要因を調査することの必要性について考慮し、これに関する項目を中心に製作者に対する様々な聞き取り調査を実施してきた。今回のワリ島の調査でも、それらの事項を中心に聞き取り調査を実施した。

それら土器現象に関わる社会的要因とは、土器製作が単なる製作と流通、販売という一連の市場経済的なコンテクストの中で展開したのではなく、親族組織や婚姻制度などの諸側面と関連しながら展開する伝統社会のコンテクストそのものであり、それらの影響と脈絡を具体的に解明する必要がある。一方、それらの伝統的社会の特質ともいうべき様々な制度と社会背景は、土器生産だけでなく土器を広く他地域にまで輸出する一連の活動体系にも大きな影響を及ぼしたに違いない。

ワリ島には二十六の集落（サブクラン）がある。集落は血縁性が強く、親族的紐帯に基づいて構成されている。それぞれが属するクランは、マギスブ、アタケナ、ダワシ、キサキサの四種で、各集落はそのどれかに属している。社会の基本構造はいまだにクランを中核とした親族組織に重点を置いているわけである。各集落にはそれぞれ女性の土器製作者がいるようで、この島で生産される土器は、それらの女性の手によるものである。クランごとにどのような土器の属性の違いが製品に反映するのか、しないのかは大変興味ある問題である。次回の調査では各集落（サブクラン）ごとに製作者を訪ねて、それぞれの土器製作に関する技術、文様意匠などの差異と共通性について調査したいと考える。

ワリ島に存する四種のクランのうち、マギスブ・クランは本島のイーストケープにも一つのクランとして存在し、複数の集落にまたがっている。それら相互の関連が、土器の輸出と受け入れという側面をどのように担っていたのか、また模倣がそれとどのように関わるのかについても、調査する必要があるだろう。それらの基本的データはイーストケープ地方におけるワリ式土器の受容と、それを模倣する側の社会的要因に関して重要な解明の端緒を与えるものである。土器の輸出と受容の関係が無差別に行われたのか、それとも親族構造を基盤として行われたのかについての調査はこれからの課題である。模倣もそれを媒介して行われた可能性があるのである。

今回はわずか二人の、しかも二週間足らずの調査だったのでそれらの項目を全て完了することは出来なかった。しかし、それらを調査する必要性をさらに痛感し手応えを感じたのも事実である。呪術や魔術などの旧来の慣習も消失しておらず形骸的にとどめており、かつて首長制の時代の伝承も聞き取ることができた。パプアニューギニア本島に比較して伝統的で保守的な生活様式を維持する点は同等である。

今後、この島における土器製作者の系譜と生産品の属性レベルの関係性や交易を通じて本島にもたらされる規則

性、模倣を通じたイーストケープ伝統への反映の仕方などを検討していく必要がある。今回の報告は、それに向けた予備的な調査の結果である。

（高橋龍三郎）

註

（1）ワリ島における土器製作時の粘土紐の作出方法は、トゥベトゥベ島でも用いられており、過去にはトゥベトゥベ島の女性がワリ島へ土器製作を習いに来ていたこともあった（May & Tuckson 1982 p85）。

（2）根岸洋氏は、本地域における土器を「櫛書文伝統」として、マッシム地方北部にみられる土器群（貼付文伝統）と対比している（Y. Negishi 2008）。

（3）大型の土器は、一般に径五十㎝以上のものである。

参考文献

Belshaw, C. S 1955 *In Search of Wealth: A Study of the Exchange of Commercial Operations in the Melanesian Society of Southeastern Papua.* American Anthropologist vol.57 No.1 Part 2 Memoir No. 80

P. May & M. Tuckson 1982 *THE TRADITIONAL POTTERY OF PAPUA NEW GUINEA.* University of Hawaii press.

Macintyre. M 1983 Kune on Tubetube and in the Bwanabwana region of the Southern Massim. *The Kula: The New Perspectives on Massim Exchange:* 369-379

Simon Foale 2005 *Sharks, sea slugs and skirmishes: managing marine and agricultural resources on small, overpopulated islands in Milne Bay, PNG.* RMAP Program, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University

高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋　二〇〇七「パプアニューギニアにおける民族考古学調査（三）：ミルンベイ州イーストケープ周辺の調査概報」『史観』第一五六冊　早稲田大学史学会

根岸洋　二〇〇七「土器作り民族誌と考古学」『物質文化』84　物質文化研究会

高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋、中門亮太　二〇〇八「パプアニューギニアにおける民族考古学調査（四）」『史観』第一五八冊　早稲田大学史学会

Y.Negishi 2008 Comb and Appliqué: Typological Studies of Two Ceramic Traditions during the Last Thousand Years in the Eastern Papua New Guinea. *Bulletin of the Department of Archaeology, University of Tokyo 22* 119-161

高橋龍三郎、井出浩正、根岸洋、中門亮太、根兵皇平　二〇〇九「パプアニューギニアにおける民族考古学調査（五）」『史観』第一六〇冊　早稲田大学史学会

高橋龍三郎、井出浩正、中門亮太　二〇一〇「パプアニューギニアにおける民族考古学調査（六）」『史観』第一六二冊　早稲田大学史学会